2022年（令和4年）
10月13日
木曜日
神戸新聞社

文珍さんの落語的見聞録１０月「亡き人から　電話があったら」神戸新聞 10月１３日朝刊より整理

亡き人から 電話があったら!?

このところ新聞の訃報欄に目がいく年となった。仕事仲間で年に何度も二人会、東西会を演った三遊亭円楽さん。互いに世代も同じで、プロデュース能力にも優れていた故人は、東京、大阪の垣根を越えて各地で大きな落語会のプロデュースも手掛け、八面六臂の活躍をし、志の半ばでその生を終えたことは誠に残念だったであろうと偲ばれる。

横浜で二人会をした時、互いに一席ずつだったのを、せっかくだから二席ずつ演ろうと提案をすると、「着物一枚しか持って来ていない」という。「じゃあ着物交換して着替えて演ろう」と言うと「心得た」と楽しげに答え、故人と私は互いの着物に着替え二席ずつ計四席演じ、お客様に大層喜んで頂いた。また宮崎にて「東西特選落語会」を開催したところ、楽屋の「本日の催し」と書かれた紙に「東西と苦戦落語会」とプリントしてあり、普通は間違いを指摘するところ、パソコンの変換ミス、誤字、脱字は日常的。彼は「きっとチケット売るのに苦戦したのだろう」と笑い転げていた。

あらためて、テレビの「笑点」で人気者で、落語も工夫を重ね、江戸の風を感じさせてくれるいい芸だったと残念に思う。

そこでだ。スマホに登録した故人の電話番号をすぐ消去するのは気が進まぬ。もしかして電話がかかって「待ってるよー」と言われたら「ゴメン！　もうちょっと、こっちにいるし」と言う以外はない。

私の新作落語「スマホ供養」では、スマホについた霊魂、これを「アイコン」と呼んでいる。お寺さんも多角経営と、スマホの護摩壇にて永代供養ならぬ「携帯供養」をし、立派なお堂を建てた。名付けて「クラウ堂」という。また五重の塔もその名を「アカウン塔」、その寺に親父が亡くなって三回忌というので、法事をしようと、兄弟が集まっていると、スマホの着メロが鳴る。誰からかな？と画面を見ると、亡くなった父親から。エーッと、ブルブル震えながら出てみると、相手は亡くなった父親ではなく、生きている母親から。そして父親の秘密が明らかになってゆく大騒動の噺。是非聞いて下さい。

この寺「ログ院」、宗教法人としてはこの時期認めてもらえないだろうなあ…。あなたのスマホ、読経は「ナンバンダ…何番だ？」

（かつら・ぶんちん＝落語家）

＝次回は11月10日＝